

# 「家がいいね」 第142号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2016. 3. 1

人生は、やせ尾根の道を辿る

3月は1日の高校に始まる卒業の季節。小中高の卒業式を、私はすべて違う土地で迎えた。友に救われ、苦難と思わずに過ごせたのは幸いだったと振り返る。考えれば、狭い尾根道を歩くのにも似て、ひとりぼっちだったら危うかっただろう。伊勢に根をおろして24年余。子どもたちは、この地で卒業式を重ねる。お互いを知りつくした友達のありがたさを、きっと知る日があると思う。

命も心も柔らかいものだから

知らない言葉を覚えるたびに  
僕らは大人に近くなる  
けれど最後まで覚えられない  
言葉もきつとある

何かの足しにもなれずに生きて  
何にもなれずに消えてゆく  
僕がいることを喜ぶ人が  
どこかにいてほしい



石よ樹よ水よ ささやかな者たちよ  
僕と生きてくれ

くり返す哀しみを照らす 灯をかざせ  
君にも僕にも 全ての人にも  
命に付く名前を「心」と呼ぶ  
名もなき君にも名もなき僕にも

たやすく涙を流せるならば  
たやすく痛みも分かるだろう  
けれども人には  
笑顔のまま泣いてる時もある

石よ樹よ水よ 僕よりも  
誰も傷つけぬ者たちよ

くり返すあやまちを照らす 灯をかざせ  
君にも僕にも 全ての人にも  
命に付く名前を「心」と呼ぶ  
名もなき君にも名もなき僕にも



「命の別名」 作詞作曲 中島みゆき 1998

ホームホスピス(とも暮らし)が現実!

在宅ホスピスを目指して、当クリニックを始め、14年が経ちます。「自宅での人生を最期まで過ごす」お手伝いをしていると教えられることばかりです。看取りをした家族が「今度は私も」と言われ、実際にそうなった例もあり、継続していて良かったと思える体験もしました。家族の中で共有できる経験ですが、地域の中では広がらないことも感じました。7割を超える人が病院で亡くなり、家の看取りは1割余の経験でしかありません。

この先、家には支える力が益々乏しくなる状況であり、病院に入院しても自宅に戻れず、施設(それも在宅と言われる)を選択する人も増える一方です。住み慣れた地域に戻りたいと思っても、それも叶うかどうかは確かではありません。

129号でも紹介しましたホームホスピスは、施設ではありません。一人暮らしなど、地域で住みたくても、病を得て困難になった方が、介護力を共有して一緒に生活をする「家」の在り方です。伊勢では常磐の「ゆず」が半年前から試みられ、半年後には岡本に「あこや」として正式に開設できます。その人に合った介護や在宅医療を提供できるために、十分な研修を重ねてスタートします。ホームホスピス開設を、順次お伝えしてゆきます。

新しい在宅クリニックへ脱皮します

4月から医療保険の内容が改定され、在宅医療の費用(自己負担分も)替わってきます。負担は増えるかもしれませんが、安心して家で過ごす体制作りに、今後もこころがけてまいります。

他の医師との協力関係として、主治医機能の補完を行います。副主治医として、野口吉文医師(玉城町・神戸クリニック)あるいは山村賢太郎医師(伊勢市小俣町・さいとうホームケアクリニック)をお願いしています。



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805  
三重県伊勢市御薗町高向 927  
電話 0596-20-8104  
ファクス 0596-20-8105  
メール [homecare@kr.tcp-ip.or.jp](mailto:homecare@kr.tcp-ip.or.jp)  
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可